

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370688

研究課題名(和文) 第二言語習得の代替的アプローチで検証する教室内英語習得と動機づけの国際比較研究

研究課題名(英文) Comparative study of classroom L2 teaching/learning motivation from the perspective of alternative approaches in SLA

研究代表者

木村 裕三 (Kimura, Yuzo)

富山大学・大学院医学薬学研究部(医学)・教授

研究者番号：80304559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：日本、中国、韓国の3か所の高等学校課程における教室内英語授業現場をフィールドとし、長期参与観察と授業者・学習者へのインタビューを重ねることによって、授業者の英語授業に対する動機づけと学習者の英語学習に対する動機づけを、複雑系理論(Complex Dynamic Systems Theory)と活動理論(Activity Theory)で解釈することが出来た。また、これら複数の理論による動機づけ解釈の差異について検証することが出来た。

研究成果の概要(英文)：Based on the longitudinal ethnographic data obtained at three different high schools in Japan, China and South Korea, the same sets of English teachers' teaching motivation and students' English learning motivation have been interpreted by two different SLA (Second Language Acquisition) theories: Complex Dynamic Systems Theory and Activity Theory. The results have indicated some interesting similarities and differences. Future research has been also proposed in terms of elaboration of English language teaching/learning motivational theories.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語授業・学習動機づけ 第二言語習得代替理論 複雑系理論 活動理論

1. 研究開始当初の背景

(1)第二言語習得(以下 SLA)の研究分野では、90年代後半まで心理計量的アプローチによる認知理論に基づいた研究が主流であったが、Firth & Wagner (1997)を契機として言語習得の社会的側面にも光が当てられるようになった。その結果、ヴィゴツキー、バフチンの学習論を底流とする社会文化理論(Sociocultural Theory,以下 SCT)が新たに登場し、やがて SLA 理論分野の一つとしてその地位を確立した。一方、SCTの精緻化と並行的あるいは発展的に登場し、alternative approach (Atkinson, 2011)として注目される SLA 理論に、Sociocognitive Approach(以下 SA)と Complex Dynamic System Theory (以下 CDST)がある。SAは言語習得の軸足をあくまでも個人の認知に置きながら、第二言語習得を「認知 身体 表象世界」という一体化した対象として捉える。他方 CDSTは、言語習得をとりまく表象を system として捉え、その特性を open, change, adaptable, non-linear という言葉で表現し、system の変化する方向を誘導する attractor という概念を提唱する。第二言語の動機づけ研究に目を向けると、90年代の量的アプローチの進化と並行して、質的なアプローチにも進展が見られる。その中でも、特に SCT やヴィゴツキー学習論を基盤とする活動理論(Activity Theory, 以下 AT)を第二言語学習の動機づけに応用する研究は近年徐々に見られるようになった(Kim, 2009)。

(2)研究開始時における以上の様な研究動向を踏まえ、本研究者もこれまでの研究費補助金研究の中で、参加者のインタビューを分析した質的動機づけ研究を展開して来た。それらの研究からは、以下の点がすでに究明されていた。

英語教師の授業実践と学習者の動機づけ、国家カリキュラムとの関連性:韓国の中学校におけるある教師の授業実践では、教師が実施したプロジェクト型グループプレゼンテーションタスク(Project-Based Learning: PBL)が学習者の動機を高めていることが判明した。そしてこのタスクを構想したこの教師の動機が、韓国第7次水準別教育課程と深い関連性を持っていることが判明した。

英語教師現職教員研修と授業実践、教師・学習者の動機づけとの関連性:中国では、都市部(北京市海淀区、初級中学、新任教師)と辺境(内蒙古自治区シリント市、高級中学、中堅教師)の地域、校種差に関わらず、国家カリキュラムの「英語課程標準:実験稿(2001年版)」の内容と校内の英語科教員会議が、英語教師の動機づけに大きな役割を果たしていることが確認された。とくに北京市初級中学の新任教師にとっては、校内英語科会議に加え、海淀区教師研修学校における教育研修がこの教師の動機づけに影響を与えていることが判明した。

これら の研究費補助金研究では教師の単発の授業を基に、SCTによって参加者のナラティブを分析・解釈した。

PBL 型授業実践による学習者の英語習得と教師・学習者の動機づけとの関連性:グループによる PBL 型授業を日本、韓国、中国の高校現場で一定期間取り組んでもらい、タスク→動機→第二言語習得の3つの異なる諸相を包括的に分析した。ビデオ接写データからは、生徒の豊富な発話と身体動作が確認できた。教師と生徒の授業・学習への動機づけを SCT により解釈し、生徒の英語語彙習得と身体動作との関連性を SA により究明した。

この研究を通じ、動機付けと言語習得を解釈する理論が、音声・画像データと研究の時間軸に極めて依存することが体得できた。例えば、上記 と の研究では、同じ PBL 型の授業でも発表風景のみの単発授業データと、グループタスク場面を2年間3回接写収集した授業データ とでは、その質と量に格段の違いが見られ、理論の応用性が異なってくる。また、 と の研究データを通時的に活用した分析では、時間軸を長く確保でき、同一の教師の内面的変化(change)と教師の動機を牽引する要素(attractor)を CDST で解釈出来た。しかし、どのような授業実践にどの理論がより合致するのかは、今後の究明課題となった。さらに、その合致する理論で解釈した参加者の動機づけの差異が教師の個人差に起因するのか、あるいは国家間の英語カリキュラムの差異に起因するののかについても、系統的・長期的に探究する必要性を強く感じるに至った。そのためには、各国の教室に一律に PBL の授業を展開するのではなく、各教師が日頃国家カリキュラムの枠内で自分のスタイルに基づいて展開する授業活動をデータの対象とする方が、より国家カリキュラムの差異が反映されやすいと考えられる。以上の点を踏まえ、本研究はこれまでの質的動機づけ研究を発展させた研究として構想された。

2. 研究の目的

本研究では、英語の授業者と学習者の動機づけを、第二言語習得(SLA)理論の代替的アプローチ(alternative approach)として近年注目されている社会文化理論(SCT)、とりわけ社会文化理論の流れを踏襲する活動理論(AT)、Sociocognitive Approach、そして Complex Dynamic System Theory(CDST)という、近接関係にありながらもそれぞれが独立した理論によって分析した時、その解釈の結果にどのような差異が現れるのかを、東アジア3か国、具体的には日本、韓国、中国の中・高等学校段階の教室現場をフィールドとして比較する。そこからは、理論による教師と学習者の動機づけの差異だけでなく、その差異が国家の英語教育政策とどう関係しているのかという巨視的な点への示唆も可能となる。

3. 研究の方法

本研究は4年間にわたり表1の「年次進行計画表」に従って日本、韓国、中国のそれぞれの現地での研究打合せ、現地参与観察から学会発表・成果公表までを一括実施した。研究手順については、図1の「授業参与観察手順」に示した。特定の学習者はデータ収集期間同一に固定した。データ分析手続きについては、図2の「データ分析手続」に示した。収集したビデオデータから、半構造化インタビューを準備し、海外での参与期間中は出張期間中に授業者と学習者へインタビューを実施した。その内容を全て文字化し、質的データ解釈ソフト(NVivo 10, 11)を使いながら、SLA代替的アプローチ理論によって3か国の教室の教師と学習者の動機づけを質的に解釈した。

日本

	H25(2013)度	H26(2014)度	H27(2015)度
観察	5-2月 A教師	4-2月 A教師	4-11月 F教師
分析	各観察ごと	各観察ごと	各観察ごと
発表	-		

H28(2016)度	
観察	-
分析	-
発表	

中国

	H26(2014)度	H27(2015)度	H28(2016)度
観察	4/20-26 C,D教師 10/19-25 C教師	6/1-6 3/1-8 C教師	9/13-20 C教師
分析	11-3月	7-2月	10-2月
発表			

韓国

	H27(2015)	H28(2016)
観察	9/8-15 E教師	9/7-12 E教師
分析	10-2	10-2
発表		

*白抜き番号は5。「主な〔学会発表〕欄の発表番号と連動

表1：年次進行計画表

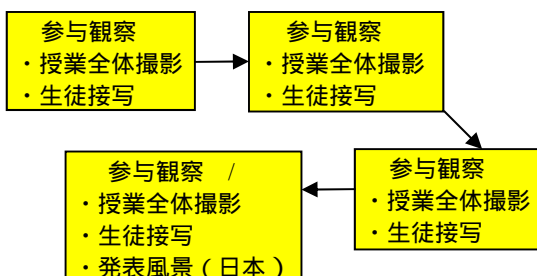


図1：授業参与観察手順

授業の記録

(1)教師と生徒の発話テキストを作成
(2)教師と生徒向けのインタビュー項目と授業場面の選定, PC 動画編集

PC動画をstimulated recallの素材とし、参加者に見せながら半構造化インタビューを実施

教師・生徒のインタビューからナラティブデータを作成

2つ*の代替的アプローチ理論に基づき、ナラティブデータを質的データソフト NVivo10, 11によって教師・生徒の動機づけを解釈

*解釈理論が当初計画した3つから2つになった経緯については「研究成果」欄に記載

図2：データ分析手続

4. 研究成果

(1) 援用した代替的アプローチ理論数の減少について

計画当初の代替的アプローチ理論は、(a) AT, (b) Sociocognitive Approach, (c) CDST の3つであった。一方、本科研費申請時、2012年9月直前に、前回の科研費補助金研究(基盤(C)課題番号 21520529)のデータを前倒しし、Sociocognitive Theory を解釈理論として分析し、その成果を Kimura & Won (2012)として発表した。この成果から、Sociocognitive Approach が第二言語習得の一端を担う理論であり、ことに身体の動き(posture)を言語習得に関連させるという点においては、極めて斬新で興味深いという証左が上がってきた。しかしながら、第二言語教育・学習の動機づけ研究にとって、身体動作と動機づけの関連性が希薄であり、必ずしもこの理論を援用して英語教育・学習の動機づけ研究を継続する価値がその労力と時間に見合うかという点において疑問が生じてきた。このため、本科研費採択決定以降は援用する代替的アプローチ理論を (a)AT と(c)CDST に限定して研究を進行させることとした。

ATはその源流をヴィゴツキーの社会文化理論(SCT)に辿ることが出来る。その根幹には、人の成長と発達を道具媒介の視点による appropriation と internalization で捉える。これを第一次世代の AT とすれば、Engeström (1999)は第二世代の AT としてその分析枠を「主体」を取り巻く「道具」、「ルール」、「コミュニティ」、「分業」、「対象」まで拡張し、その先に「成果」を位置づけ、「活動システム」として分析枠を確立した。さらに Engeström (2001)では2つ以上の活動システムの相互作用に分析の視点を発展させ、第三世代 AT と進化させている。

一方 CDST は、自然科学を発祥とし、事象の変化を系(system)で捉える。system はパラメータによって変化し、その変化を誘う力を attractor と呼ぶ。system は仮想空間である state space を移動し、やがて一定の位置に静止する。その状態を attractor state と呼ぶ。attractor state は、しかしながら「終の棲家」ではなく、更にその先へと移動・変化する可能性も秘めている。attractor state には正・負が存在し、安定度はその窪地(basin)の深さの程度で例えられる。

(2)日本のある高等学校の実践を CDST と AT に基づいて解釈した結果について(次節 5, 主な発表論文等, [学会発表])

対象校と英語教育実践: 日本の北陸地方に位置するある高等学校。英語教育の特徴である PBL(Project-based Learning)を解釈した。

参加者: 英語科 A 教師とフォーカス生徒 3 名(亜希, 真理, 恵, 仮名)。A 教師は研究開始時教師歴 10 年を超え, PBL による英語教育の先駆的实践者である。

分析対象データ: H25(2013)年 7 月から H27(2015)年 3 月までに実施された 9 回のプロジェクトに対する 11 回の生徒へのインタビュー

分析結果: 以下の[a][b]の 2 か所について, CDST と AT による動機づけ軌跡の解釈を試みた。[a] 9 回のプロジェクトの動機づけ軌跡を 3 人に尋ねてみたところ, 参与観察開始当時, H25(2013)年 7 月のインタビュー時には教具として使用している iPad を使う英語授業に新鮮さを感じ, 強く動機づけられている趣旨の発言をしていた。ところが, H26(2014)年 5 月のインタビューでは iPad に対して懐疑的な発言が見られた。[b] 3 人が共通して他のプロジェクトよりも比較的高い動機づけを示した 2 つのプロジェクトが H26(2014)年 11 月(コマーシャル・メッセージ作成プロジェクト)と H27(2015)年 3 月(映画作成プロジェクト)である。このうち, コマーシャル・メッセージ作成プロジェクトでは紙と鉛筆を使って 4 コマ漫画を描き, 製品をプロモーションする活動を行ったが, H26(2014)年 11 月のインタビューで, 3 人とも久々のアナログ素材に触れた趣旨の発言と, 真理が漫画を描くことが得意であったことで真理の上手な漫画に亜希と恵は動機づけられた趣旨の発言をした。一方, H27(2015)年 3 月の映画作成プロジェクトでは, 亜希と恵は同程度に強く動機づけられていた一方で, 真理だけが, A 教師の支援なしに映画プロジェクトを完成させることへ一抹の不安を感じる発言をしており, 明らかに他の 2 人とは異なる動機づけの軌跡を提示していた。

CDST と AT による事象の読み取りの差異: 最大の特徴は, [b]において真理が描いた漫画描写により, 亜希と恵がプロジェクト遂行に動機づけられている点を AT が見事に真理の漫画素描技能を「道具」として捉え, 亜希と

恵が真理の「道具」としてのこの漫画素描技能を媒介することによって更に動機が高められたという読み取りが出来たことである。一方, CDST が同じ事象を attractor state として捉えシステムの安定度として描写できた点も AT とは顕著に異なる解釈である。

(3)中国の高級中学(日本の高等学校)の英語授業実践を CDST と AT に基づいて解釈した結果について(次節 5, 主な発表論文等, [学会発表])

対象校と英語教育実践: 中国北京市にある大学附属高級中学。日本の高等学校過程に相当する。

参加者: 英語科 B 教師, C 教師, D 教師とフォーカス生徒 4 名(エヴァ, バーバラ, ケイト, モニカ 仮名)。B, C, D 各教師の英語科教師歴は研究開始時それぞれ 17 年, 24 年, 20 年。

[1]参与観察対象授業時期, [2]生徒学年, [3]担当者, [4]内容, [5]対象データとなるインタビュー実施時期:

- [1]H23(2011)年 9 月, [2]1 年生, [3]B 教師 [4]PBL 授業(Lifestyle of Famous People), [5]H24(2012)年 2 月
- [1]H24(2012)年 5 月, [2]2 年生, [3]B 教師, [4]PBL 授業(Creating a Travel Brochure), [5]H24(2012)年 12 月
- [1]H26(2014)年 4 月, [2]3 年生(本科研費補助金助成期間), [3]バーバラとモニカは C 教師, エヴァとケイトは D 教師担当, [4]大学入試対策授業, [5]H26(2014)年 4 月

分析結果: 4 人の生徒が 1 年生の時の PBL 授業は B 教師がその当時に使用していた『普通高中课程标准实验教科书英语 1』(王ほか, 2004)の中のタスクの発展課題として実施された。当時 PBL 形式のグループによる課題遂行・発表型の英語授業を始めて経験した 4 人の生徒は, この英語授業に強く動機づけられた。B 教師のハンドアウト構造にも, グループ活動にも, この 4 人のグループが Famous People として選んだ中国の人気アニメ, 『喜羊羊和灰太狼』にも, そして最後の発表に対しても満足感を表明し, 強く動機づけられていることが判った。しかしながら, インタビューの終盤で, エヴァが, 「いつもこのような PBL 型の英語授業は困る, 英文法の知識や良い英作文の議論が足らなくなる」と発言し, ケイトも「私たちには英語の入試のための授業も必要」と発言した。

一方, 2 回目の PBL 授業に関する 3 人の生徒のインタビュー発言は極めて肯定的であった。それは旅行冊子を作製し, 教室で発表するという PBL のやり方に動機づけられていただけでなく, 2 回目の PBL のタスク, すなわち, 完成させる英文の難度, 分量ともに大学入試にも有用であった, という発言から, 4 人の英語学習には大学入試がその動機づけの要因として強く働いていることがうかが

えた。更に 3 回目の 3 年生次の大学入試準備のための授業に対するインタビューでは、大学入試のための模擬問題を解くこと強く意識した C 教師と D 教師の授業であったが、4 人の生徒からは全く否定的な回答はなく、むしろ強く動機づけられている趣旨の回答が得られた。

CDST と AT による事象の読み取りの差異：4 人の生徒の 1 年次の初回 PBL 型授業に対する懸念を AT では「道具」と「コミュニティ」のノードに対する緊張感と捉えた。一方、同じ事象を CDST では異なる attractor state への移動として捉え、2 回目の PBL ではより安定した attractor state への移動として、更に 3 年生次の大学入試準備のための英語授業が最も安定した attractor state であるという解釈に至った。この事例研究においても、「媒介」を論点とする AT と、system が attractor に惹きつけられて変遷するという CDST の解釈の差によって、説明力に差が感じられた。「媒介」を介した他者の「模倣」から自己への「内化」を標榜する AT には、system の attractor state への移動という CDST にある自由度に比べると、制約度が高いように思われる。しかしながら、一旦 AT による解釈に整合性が見出せれば、より説得力のある理論づけができるように思われる。

(4)日本、中国、韓国の高等学校 3 校の 3 名の教師の英語教育動機づけを CDST で解釈した結果について(次節 5、主な発表論文等、[学会発表]、現在図書出版準備中論文)

参加者：日本、中国、韓国の高等学校 3 校で実施した本科研費補助金研究にこれまで参加した B 教師(中国)、E 教師(韓国)F 教師(日本)

分析方法：3 名の英語科教師の平成 28(2016)年 3 月時点で収集している英語授業実践についての半構造化インタビューの内容を、教師の英語授業への動機づけについて、CDST を援用して分析した。

分析結果

中国 B 教師：B 教師は H17(2005)年に初めて授業を参与観察し、その後本科研補助金研究実施期間中の H26(2014)年 4 月のインタビューを以って参加が最後となった。この間の英語教師としての動機づけについて以下のように分析・解釈した。H17(2005)年と H19(2007)年に参観した授業では、1 年生と 3 年生の同じ学年集団の生徒の授業を担当していた。1 年生の時の英語授業は、英語をコミュニケーションの道具として捉え、生徒にコミュニケーション活動を通して大学入試問題にも対処するという工夫が見られた。しかしながら、同じ学年集団を教えた H19(2007)年の 3 年生の授業では、その全てが入試問題対策授業に一変していた。“So usually for the first two years, I will try to make my classes as comfortable as possible, maybe students can feel relaxed. They like to speak

English. But in the third year, I'll change my way.”(2005/05/30 インタビュー)の言葉が如実に B 教師の 2 つの英語授業 system の存在を示唆しており、その 2 つの system で attractor states を形成していると解釈した。その後 H23(2011)年と H24(2012)年に再び参与観察した授業では、B 教師のインタビューから、英語教師として今後生徒を指導する意思よりも、むしろ自分自身の英語力向上のための長期留学を希望する趣旨の発言がよく見られるようになって来た。このことから、B 教師は、英語教師としての system で attractor state を形成するだけではなく、この頃からすでに英語学習者としての system においても attractor state を併存(co-adaptive)させていたと解釈した。そしてその英語学習者としての system がやがて英語教師としての system にどのような影響を与えるかについて、今後の継続した参与観察が必要であると結論した。

韓国 E 教師：E 教師は H22(2010)年にその授業参与観察を開始し、H23(2011)年まで本科研費研究の前の基盤(C)(21520569)で継続観察した。その後 E 教師は新しい外国語高校に転勤し、本科研費研究では H27(2015)から H28(2016)まで新しく赴任した勤務校で参与観察を継続している。同じ外国語高等学校であるが、前任校とはかなり状況が異なっており、E 教師が置かれた新しい勤務校での system では、数々の困難が E 教師に突き付けられていることが判明した。例えば、元来極めて英語教育に有能な力を発揮してきた E 教師は、前任校では開学メンバーの中核教師の一人でもあったため、若いながらも学校幹部や周囲の同僚から信頼感を持たれていた。しかしながら、現任校では、学校幹部からの E 教師の真の英語教育能力への正しい理解が進んでおらず、E 教師は現在深い basin の attractor state に吸い込まれている状況であると解釈した。

日本 F 教師：F 教師は前頁 A 教師の同僚の英語教師であり、A 教師がフォーカス生徒 3 名を 2 年生の時点まで担当したのに対し、F 教師は A 教師が担当したフォーカス生徒の担任を 2 年生から 3 年生まで担当した教師である。この F 教師が 3 年生を担当した 1 年間の授業について、参与観察とインタビューから、F 教師の英語教師としての成長の軌跡を以下のように分析した。

2 年生までフォーカス生徒の学年の担任であった F 教師は、3 年生の担任を継続することを学校長から打診される。勤務校で F 教師が担任となっていたのは英語の特別クラスであり、その期待は勤務校内のみならず、地域からも注目されることになる。担任を引き受ける以上、生徒を全人的にバックアップし、また英語の授業者としても、ただ単に入試対策模擬問題を繰り返すような授業をするのではなく、英語を介して生徒の成長に貢献したいと願う。この大きな課題に挑戦する決心

をしたF教師は、半年後に英語教師としても、また担任としても大きな成長を遂げる。F教師が3年担任に任命された当初H27(2015)年4月のsystemから、大学受験などの生徒の人生の関門通過に大きく寄与して行きついたH28(2016)2月のsystemは、成長の attractor stateへのシフトと解釈した。

今後の研究展望：これらの事例を踏まえ、更に今後科研費を獲得しながらさらに事例研究を継続・蓄積することが重要である。

References

- Atkinson, D. (Ed.). (2011). *Alternative approaches to second language acquisition*. Abingdon: Routledge.
- Engeström, Y. (1999). Innovative learning in work teams: Analysing cycles of knowledge creation in practice. In Y. Engeström, R. Miettinen, & R.L. Punamäki (Eds.), *Perspectives on activity theory* (pp. 377-406). Cambridge: Cambridge University Press.
- Engeström (2001). Expansive learning at work: Toward an activity theoretical reconceptualization. *Journal of Education and Work, 14*, 133-156.
- Firth, A. & Wagner, J. (1997). On discourse, communication, and (some) fundamental concepts in SLA research. *The Modern Language Journal, 81*, 285-300.
- Kim, Tae Young (2009). The Sociocultural interface between Ideal Self and Ought-to Self: A case study of two Korean students' ESL motivation. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 274-294). Bristol: Multilingual Matters.
- Kimura, Y. & Won, J. (2012) *Second language acquisition and teaching/learning motivation: A sociocognitive perspective*. Proceedings of the 38th JASELE Convention, 査読無, 420-421.
- 王薔, Harris, M., 曹瑞珍, 王源, 陈则航, Mower, D. (2004). 普通高中课程标准实验教科书英语 1.北京：北京师范大学出版社

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計5件)

Kimura, Y. (2016, September). *L2 learning motivation in two pathways: Further analyses from AT and DST perspectives*. Paper presented at the 55th JACET International Convention, Sapporo, Japan.

Kimura, Y. (2016, April). Cross-boundary trajectories of L2 teacher motivation and autonomy between complex systems: L2 classroom contexts in Far East. In Y. Kimura (Chair), *Second language teacher motivation, autonomy, and development in the Far East*. Colloquium conducted at the American

Association of Applied Linguistics Annual Conference, Orlando, FL, USA.

Kimura, Y. (2015, March) *Two different pathways of L2 motivation?: Further examination in AT and DST perspectives*. Paper presented at the American Association of Applied Linguistics & the Canadian Association of Applied Linguistics Joint Conference, Toronto, Canada.

Kimura, Y. (2014, August) *Shame and L2 teacher motivation: Cross-boundary trajectories of motivation, identity, L2 self and autonomy across complex systems*. Paper presented at the International Conference on Motivational Dynamics and Second Language Acquisition, University of Nottingham, Nottingham, UK.

Kimura, Y. (2014, August) *Two different pathways of L2 motivation? From AT and DST perspectives*. Paper presented at the 17th International Applied Linguistics Association (AILA) World Congress, Brisbane, Australia.

[図書](計1件)

Kimura, Y. (2015). ELT motivation from a complex dynamic system theory perspective: A longitudinal case study of L2 teacher motivation in Beijing. In K. Csizer & M. Magid, (Eds.), *The impact of self-concept on language learning* (pp. 310-329). 審査有, Bristol: Multilingual Matters.

6. 研究組織

(1)研究代表者

木村 裕三 (KIMURA, Yuzo)

富山大学・大学院医学薬学研究部・教授
研究者番号：80304559

(2)研究協力者

元 璋浩 (WON, Jang-ho)

金 兌英 (KIM, Tae-young)

马 莉 (MA, Li)

徐 淑香 (XU, Shuxian)

吕 丹 (LÜ Dan)

扬 鲁新 (YANG, Luxin)

ローレンス ワン (LAWRENCE, Wan)

高橋 千春 (TAKAHASHI, Chiharu)